目次

はしがき……松尾　聰……一

研究篇

異文と異訓――源氏物語の表現空間㈢……野村精一……七

六条御息所悪霊事件の主題性について……深沢三千男……四五

光源氏の女君たち……鈴木日出男……九九

「源氏取り」の物語の方法……中野幸一……一五一

『風につれなき物語』考――『源氏物語』との関連にも触れつつ――……樋口芳麻呂……一七一

早歌にあらわれた源氏物語の世界――「深き思」の種々相――……外村南都子……二一一

与謝野晶子と「源氏物語」……新間進一…二四七

資料篇

藤原定家自筆
「定家小本」〈翻刻〉……待井新一…二八五
学習院大学蔵
「珊瑚秘抄」〈影印〉……松尾聰…三三

研究篇

一

幻巻の中ほどに、花散里と源氏の、次のような贈答がある。

夏の御かたより御衣かへの御さうそくたてまつり給とて

夏衣たちかへてけるけふはかりふるき思ひもすゝみやはせぬ御返

は衣のうすきにかはるけふよりはうつ蟬の世そいとゝかなしき

いま必要上大成本文（大島本）によった。ところで、贈答の内容に特に問題があるわけではない。いま取上げようというのは、「御返」のよみ方である。最も新しい注釈書である、小学館版日本古典文学全集本には、次の如くなっている。

夏の御方より、御更衣の御装束奉りたまふとて、

花散里夏衣たちかへてける今日ばかり古き思ひもすすみやはせぬ

御返し、

源氏羽衣のうすきにかはる今日よりはうつせみの世ぞいとど悲しき

ところでこの「御返し」には頭注が附せられ、

底本「御返」。「御返り」とする本もあるが、返歌の意で「御返し」とよんでおく。

とある。事実、同じ底本を用いてある角川書店版『源氏物語評釈』第九巻においては「御かへり」、同じ著者の角川文庫版においては「御返り」と明記され、朝日新聞社版日本古典全書本においても「御かへり」とする。底本は異るが、本文としては同じ「御返」をもつ書陵部蔵三条西証本によった岩波書店版日本古典文学大系本もまた、「御返（り）」としているのである。が、それらの根拠とするところは、明記されてはいない。思うに、右の全集本頭注のいう如く、「かへし」が返し歌の意であるとすれば、他の諸家はここを返り事（又は返り言）の略としての「かへり」とよんだものだろうか。

ところで、そのまま幻巻をよみすすんでみよう。今度は幻巻も大尾に近いところで、源氏と御仏名の導師との贈答があ